

2022年8月21日

年間第21主日

菊地功大司教 メッセージ

パウロ6世が第二バチカン公会議閉幕から10年となる1975年、大聖年に発表された使徒的勧告「福音宣教」は、現代社会にあつて福音に生き、福音をあかししようとするわたしたちにとって、今でも重要な道しるべとなっています。

教会が福音を告げしらせる必要性を、教皇パウロ6世は、「教会も目の前に、福音を必要とし、それを受ける権利を持っている無数の人々を見えています。なぜなら、『神は、すべての人が救われて真理を知るようになることを望んでおられる』からです」(57)と記しています。

その上で教皇は、「たとえわたしたちが福音をのべ伝えなくても、人間は神のあわれみによって、何らかの方法で救われる可能性があります(80)」とまで記しています。

「キリストの苦しみと死は、いかにキリストの人性が、すべての人の救いを望まれる神の愛の自由で完全な道具であるかを示して」と、カテキズムの要約に記されています(119)。

神はすべての人が救われるのを望まれているのは確実であり、ご自分が賜物として与えられたすべてのいのちを愛おしく思われる神は、その救いがすべての人におよぶことを望まれています。

だからといって、わたしたちがなにもしないで、それどころか自分勝手に生きていたのであれば、果たしてそこに救いはあるのだろうか、今日のルカ福音は問いかけています。

イエスは、「救われる者は少ないのでしょうか」という問いに、直接には答えていません。なぜならば、救われるはずの者は、すべての人だからです。しかしその「すべて」を、「少

ない」者とするのは、神の側ではなくて人間の側の勝手であることを、「狭い戸口から入るように努めなさい」というイエスの言葉が示唆しています。それに続く話で常に目覚めて準備をしている必要性が語られていますが、ここで重要なのは、救われるはずのわたしたちが、いかにしてそれを「少ない者」としないように、常に努力をしているのかどうかであります。

先ほどの「福音宣教」におけるパウロ6世の言葉には、続きがあります。

「しかし、もしわたしたちが、怠りや恐れ、また恥あるいは間違った説などによって、福音を述べることを怠るならば、果たしてわたしたちは救われるでしょうか (80)」

この世における狭い戸口は、わたしたちが福音の証し人となることを躊躇させるような、様々な誘惑のなせるところであります。福音を告げ知らせることへの怠り、それによってどういう反応があるのか見通せない不安による恐れ、社会全般を支配する価値観の中で、それとは異なる価値観を生きる事への恥ずかしさ、真理とかけ離れた説による誘惑。こちらにこそ真理がある、こちらこそ正しい道だという主張には、時としてわたしたちを惑わせ、イエスの福音から引き離す誘惑の力が潜んでいます。

パウロ6世の「福音宣教」の続きには、教皇の願いがこう記されています。

「願わくば、現代の人々が、悲しみに沈んだ元気のない福音宣教者、忍耐を欠き不安に駆られている福音宣教者からではなく、すでにキリストの喜びを受け取り、その熱意によって生活があかあかと輝いている福音宣教者、神の国がのべ伝えられ、教会が世界のただ中に建設されるために喜んでいのちをささげる福音宣教者から福音を受け取りますように」

イエスに従うと決めたわたしたち一人ひとりが、その福音宣教者です。